

平成 30 年度 第 3 回
アーバンデザインセンターびわこ・くさつ事業運営懇話会

平成 31 年 2 月 19 日 (火) 開催

1. 平成 30 年度事業実施状況

(1) アーバンデザインスクールおよび未来創造セミナー

①アーバンデザインスクール

(前期) 合計参加者 104 人 (うち、3 回以上参加者 14 人)

「歩いて巡る地域の魅力の伝え方」をテーマに歴史や文化や空間づくりを 5 回シリーズで実施し、最終回は、地域資源を活かした、“歩いて巡りたくなる地域のアイデア”を題材にワークショップを実施。ワークショップでは、事前に現地を歩いた学生の成果発表もあり、その経験が融合し、個性的な 12 コースのアイデア提案があった。ここから出たアイデアを次年度に何らかの形で活かしていく。

(後期) 第 3 回までの合計参加者 94 人

「情報と都市」をテーマに、立命館大学のスタジオデザインプログラム (SDP) と共同開催であるため、講師の方は多彩な顔触れになっている。また、最終回には滋賀県の土木交通部から講師に来ていただく関係から、滋賀県の後援もいただいている。内容的には専門性が高く、主な参加者は学生であり (計 32 人)、一般市民の参加が少ないものの、多様な方が UDCBK で学び、それをどのようにまちに活かしていくのかを考える機会に結びついている。(詳細は別紙①参照)

②未来創造セミナー

全 12 回企画、10 回分終了までの合計参加者 186 人

今年度は、大きなテーマを基にし、3 回シリーズでのセミナーを多く取り入れた。「SDGs」では、大学、滋賀県、企業、「駅からひろがるまちづくり」では、企業、滋賀県、草津市と、それぞれの取組を紹介していただき、産学公連携のセミナーになった。また、新たな取組として、市の他部署と関わっている企業の方を講師に招いたり、学生主体で企画から市民の意見を反映させるセミナーも実施するなど新たな展開が見られた。

(詳細は別紙②参照)

(2) 社会実験事前調査事業

6 つのテーマを提示し、包括協定締結大学 (立命館大学、滋賀大学、成安造形大学、京都橘大学、滋賀県立大学、滋賀医科大学、龍谷大学) に募集。結果、立命館大学から 2 件、滋賀医科大学から 1 件、合計 3 件の応募があった。(詳細は別紙③参照) 委託期間は平成 31 年 2 月 28 日までであるが、事業は 1 月末までに完了し、調査報告書を提出していただき、2 月中に成果報告会を UDCBK で実施し、地域へ還元する。前回の運営懇話会でも委員から御意見をいただいたとおり、今年度は提案募集をかけるのが 8 月と大変遅くなり、かつ、大学の夏季休暇期間と重なった事、委託期間が 4 か月と短かった事が応募数の少なかった要因と考えられる。来年度については、平成 30 年度の募集テーマをベースとして、早い段階で提案募集を行うこととする。

(3) その他事業

草津商工会議所と市民活動団体、草津市と立命館大学、草津市と草津市国際文化協会などの共催事業をはじめとし、立命館大学の学生サークルや草津市の事業計画の説明会や市民の意見を聞く場として、UDCBK を活用いただく機会も増えてきた。(別紙④参照)

また、他市からは視察や意見交換会の申し出もいただいた。(別紙⑤参照)

(4) UDCBK 利用状況 (1 日平均利用者数 42.4 人)

<平成 30 年 4 月～平成 31 年 1 月>

① オープンスペース利用者 7,794 人 (1 日平均 38.5 人) (別紙⑥参照)

アンケート回答者 308 人 (新規利用者に記入依頼)

初めて UDCBK を利用される方は、アンケートから見ると、女性が約 7 割。特徴としては、10 代が 47%、20 代が 18%。市内在住者が 67%、学生 (児童・生徒含む) が 56% である。次に利用が多い世代は 30 代と 40 代である。学生 (児童・生徒含む) は勉強を目的とし利用している姿が見られ、30 代と 40 代はコミュニティの場として利用している。アンケートは、UDCBK の利用が初めての方に御協力いただくようにしていることから、回答者数からみると、リピーターが多いと推測される。

② イベント参加者 773 人

アンケート回収率約 8 割

アーバンデザインスクールおよび未来創造セミナーは必ずアンケートを実施している。参加者は男性が約 7 割と、オープンスペース利用者と比率が逆になる。テーマにより参加される年齢層が異なることから一概には言えないが、アーバンデザインスクールは 20 代と 30 代が多く、学生の割合も高くなる。その一方、未来創造セミナーは 40 代が 29%、50 代が 24%、市内在住者が 56%、会社員が 49% である。今後、イベントを企画する上で、参加の少ない年齢層に着目する必要がある。

これらの状況を考慮し、来年度はオープンスペース利用の市民の方からの意見を今まで以上に UDCBK の運営に取り入れる仕組み作りを考えていく必要があると考える。

2. 平成 31 年度実施予定事業

UDCBK が開設して 2 年余りが経過し、UDCBK の認知度が徐々に高まっている状況である。ここで、さらに産学民の協力を得て都市空間のデザインを考えることを強化し、都市のパブリックスペースの質を向上させるために、以下の事業を実施する予定。

(1) 都市デザイン連携プロジェクト

南草津駅に隣接する地に完成予定 900 戸の住宅が立ち並ぶ予定のプリムタウンの開発が始まっています。新しい街に住む人々と区画整理組合・市関連部局と共に、周辺の景観や交通アクセス問題などを踏まえ、公園を中心としたまちづくりや草津市版地域再生計画の対象地域の諸問題に関わり、地域の方々と協働し、問題解決を図る。

(2) 交通まちづくりプロジェクト

南草津駅周辺の交通渋滞問題については、地域・大学・行政の共通問題である。将来の交通体系を見据えたまちづくりを考える。

(3) 大学を活かしたまちづくりプロジェクト

当市は立命館大学があり、近隣には、滋賀医科大学、龍谷大学があり、その他、包括協定を多くの大学と締結させていただいており、「知」に恵まれた市である。市民と学生の交流をはじめ、大学・地域・行政との連携の仕組み作りを行う。

(4) 都市デザイン学習

- ① アーバンデザインスクール（計 10 回／前期 5 回・後期 5 回）
- ② 都市デザインセミナー（計 18 回）
- ③ まち塾@まちライブラリー展開

(5) 社会発信

- ① ウェブサイト、SNS、紙媒体等による UDCBK 広報
- ② 都市デザインコンペティション
- ③ その他（包括協定大学等による社会実験準備事業）

平成 30 年度まで実施していた未来創造セミナーは、内容を都市デザインとしての位置づけを明確にするために「都市デザインセミナー」に名称を変更する。UDCBK 社会実験準備事業については、従来の事業スキームに都市デザイン連携プロジェクトとして、プリムタウン計画等の内容を盛り込み、草津市および JR 南草津駅周辺のまちづくりを都市デザインの視点から取り組む。現時点での案は次頁のとおり。

平成 31 年度 UDCBK 社会実験準備事業募集テーマ一覧（案）

No.	テーマ	概要
1	楽しく歩ける 路面標示の デザイン	<p>草津市は、市民が生きがいをもち、住む人も訪れる人も健やかで幸せになれる「健幸都市くさつ」の実現を目指しています。そのために、思わず歩きたくなる道、楽しく歩ける道の整備として、駅周辺等に主要施設等の目的地までの距離や消費カロリー等を示した路面標示を設置するデザイン案を求めます。このことにより、街中を楽しく歩いてもらうとともに、中心市街地の回遊性を高めるほか、まちの賑わい創出にも寄与する計画を求めます。</p> <p>※「草津市健幸都市基本計画」参照のこと。</p>
2	歩いて 暮らせる まちづくり	<p>草津市における交通手段の状況を見ると、徒歩での移動は少なく、また市内移動のような短距離移動であっても自動車を利用する人が多く、3～7kmの移動では自動車の利用が7割を占めています。そのため、駅周辺では朝夕のラッシュ時に送迎の車と通勤・通学のバス等が交錯し、深刻な渋滞が起きています。そこで自動車の過度な利用を抑制し、健康づくりにつながる徒歩や自転車、あるいは公共交通による移動を増やすことが重要です。そこで、思わず歩きたくなる街路空間づくりや公共交通の利用促進につながる社会実験計画を求めます。</p> <p>※「草津市健幸都市基本計画」、「草津市立地適正化計画」（案）、「草津市地域公共交通網形成計画」（案）参照のこと。</p>
3	安全・安心に 配慮した 公共空間の 整備	<p>出かけたくなるまちづくりの実現には、誰もが安全に、安心して出かけられる都市空間をデザインすることが重要です。そのためには、どのような人が、いつ、どこで、どのような行動をしているか、移動に何を利用したか、移動した場所でどんな活動をしたかなど人々の日常生活のパターンを把握する必要があります。また都市空間をリデザインした効果を測定するためにも必要なデータとなります。そこで、スマートフォン等を利用した安く、早く、人々の参加も得やすい簡単な調査も含めて、安全・安心に配慮した公共空間を検討するとともに、その効果を測定するために必要な人々の活動を把握するための社会実験計画を求めます。</p> <p>※「草津市健幸都市基本計画」参照のこと。</p>
4	しごとの 健幸づくり	<p>UDCBK は総合計画、立地適正化計画において南草津駅前の産学公民の交流拠点として位置づけられています。健幸都市基本計画では、交流拠点に加え、さらに健康分野における産学公民連携の場としても期待されています。そこで、交流拠点に集まった人々が、様々なイベントを通じて互いを知り合い、健幸都市づくりに繋がる活動を創出するための仕組みに関する社会実験計画を求めます。</p> <p>※「草津市健幸都市基本計画」参照のこと。</p>

5	健康活動を誘発する環境づくり	<p>健康の維持・増進のためには、個人の健康に関するデータとともに日常生活の活動に関するデータが必要です。この活動データから、健康を高める可能性のある活動や情報を抽出し、健康データとの相関を調査する必要があります。このためには ICT の活用により、可能な限り個々人の活動データを収集し、健康データと関連付けて分析・測定を行い、健康活動を誘発する情報の提供のあり方や都市空間のリデザインによる健康に良い活動の誘発などの社会実験計画を求めます。</p> <p>※「草津市健幸都市基本計画」参照のこと。</p>
6	文化 「文化を知る」から「文化を創る」へ	<p>文化活動が盛んな地域は社会関係資本が充実している傾向があることから、健康長寿と言われていています。このような文化活動を行うためには、活動を行える安全な空間、人々が人や情報と出会い、交流する空間、そして具体的で魅力的なストーリーが必要です。「草津市文化振興計画」では、UDCBK は産学公民連携による新たな文化活動を創出する場として位置づけられています。そこで、新たな文化活動を創出するプロセス（メカニズム）に関する社会実験計画を求めます。</p> <p>※「草津市文化振興計画」参照のこと。</p>
7	自然 「琵琶湖」から、湖畔、流域、そして高台へ	<p>草津市のまちづくりについての市民意識調査の「都市のイメージ」では、「水と緑にあふれた自然豊かなまち」が常に上位となっています。また「地域資源」の調査では「烏丸半島など琵琶湖畔」が一位になっていますが、現状は利活用されているとは言いがたい状況です。そこで、琵琶湖の水辺空間や有形文化財などを保全しながら、利活用するための社会実験計画を求めます。</p> <p>※「草津市文化振興計画」、「草津市版地域再生計画」（案）参照のこと。</p>

3. 法人化検討ワーキング部会（報告）について

前回の運営懇話会（平成30年10月4日（木）開催）において、UDCBKのミッションや主たる事業内容等については委員の一定の共通理解を得た。ただし、法人化に対しては委員から様々な意見が寄せられた（前回の運営懇話会の議論内容および委員の意見について、別紙⑦参照）。

第3回法人化検討ワーキング部会（平成31年1月30日（水）開催）において、法人化した際の運営体制や持続可能な運営資金計画などの課題も多いことから、平成31年度は引き続き現行の組織形態（草津未来研究所（UDCBK））として運営しながら、これらの課題整理を行うこととして部会の意見として一致した。平成31年度は、産学民の協力を得て、これまでの積み重ねをベースとしてUDCBKを運営しながら、課題解決を実現するにはどのような組織に改編していくことが望ましいかを引き続き検討していく。そこで、今年度で法人化検討ワーキング部会としての検討は終了し、来年度からは市が主体となってUDCBKの運営組織のあり方について、多様な組織形態を念頭におきつつ、引き続き検討し、運営懇話会において、適切な時期に報告し、議論していく。

前回の運営懇話会にて、法人化の検討をする上での参考として、他のUDCの組織形態等の情報提供を求められたことから、別紙⑧のとおり提示する。